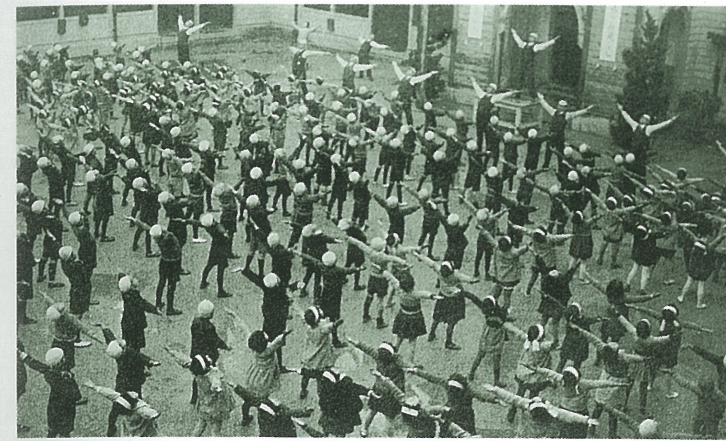


戦時下の教育

昭和16年4月に、小学校が「国民学校」と改称されてからは、いっそう軍国主義教育の風は強くなりました。防空訓練や、勤労奉仕（甘しょづくりなど）の行事も加わりました。



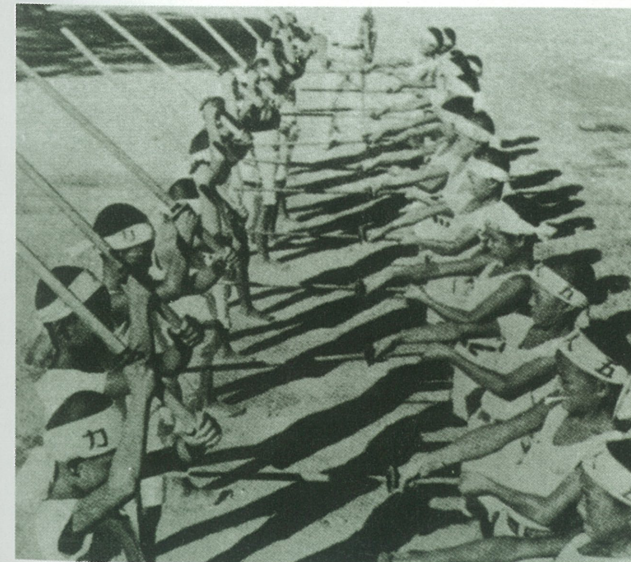
山手小学校校舎の擬装



朝会のようす 昭和14年、精道小学校



戦時下の運動会 山手小学校



戦時中の小学校高学年男子の体育 精道小学校

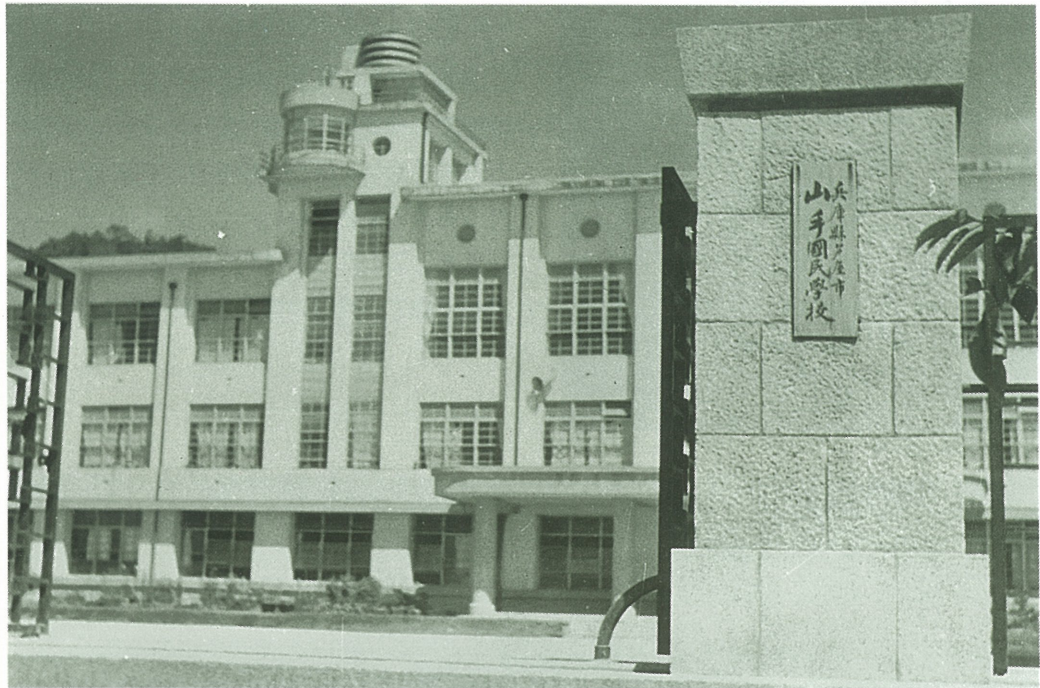
学校の様子

芦屋市では、昭和19年2月には、山手国民学校で全児童への味噌汁給食を開始し、精道校でも5月に、戦時学校給食が開始され、翌年3月まで続けました。

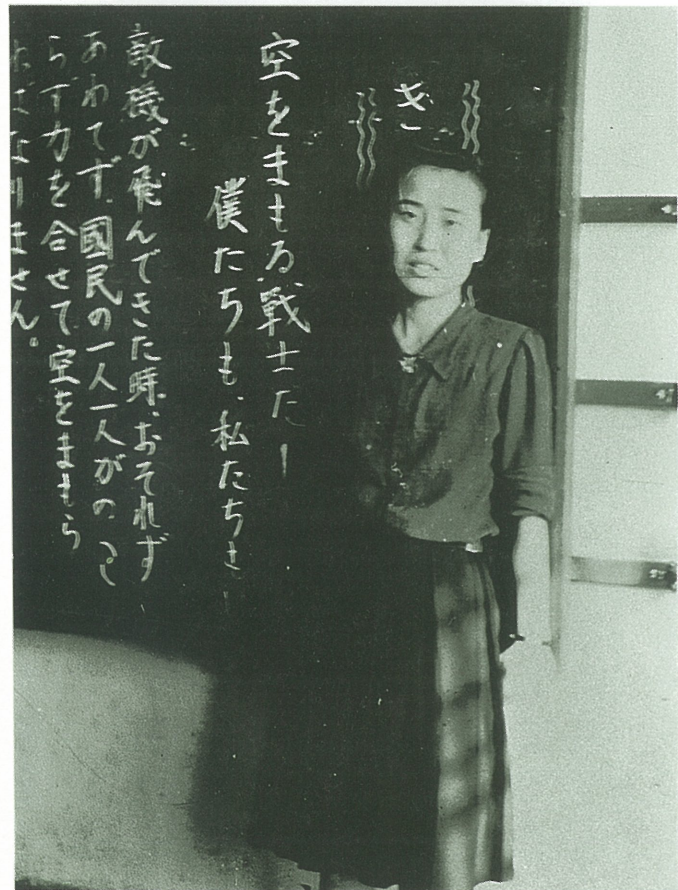
また、このころの学校の運動会を見ても戦時色一色で、当時の世相を物語っています。



乾布まさつ 昭和17年、岩園小学校



国民学校令実施 市内の4小学校は国民学校と改称され、
いっそう軍国主義教育の風が強くなった。



黒板の文字に戦時中の世相がうかがわれる。



精道幼稚園 精道小学校内に明治44年10月に開園した。
この写真は昭和16年ごろの園児。



女子青年学校 女子青年学校ははじめ宮川小学校に併置され、
昭和14年4月に岩園小学校に併置替えされた。



青年学校男子部は精道小学校内に設置

青年学校

昭和10年に青年学校令が施行され、同14年には義務制となりました。

昭和15年、市制施行当時の青年学校校則によると心身の鍛練、徳性の涵養をうたい、職業および實際生活に必要な知識技能を授けることを目的としています。

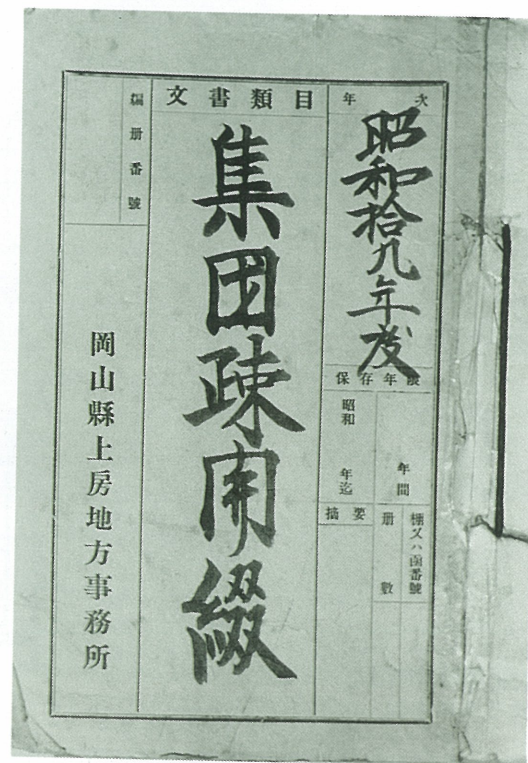
男子生徒の場合、行軍や兵營見学、滑空訓練なども実施し、愛国青年・皇国民の練成が行われました。

集団疎開

昭和20年4月から空襲がはげしくなり、7月になると、精道国民学校学童223人、宮川国民学校学童207人は、岡山県上房郡に集団疎開を行いました。

疎開中は、地元の小学校と連絡を密にして学習にはげむほか、燃料の薪を集め、食料の補いに魚をとり、甘しょ栽培を行ったりしました。降雨がなく飲料水や風呂水にも困り、台風の影響もあり、梅酢の味付けで麦の雑炊を1週間もすすすることもありました。

集団疎開綴 受け入れ先の高梁市に保管されていた公文書で、芦屋から疎開した子どもたちに食料難のなか何とか地方のよい生活体験を味わってもらえるようにとの地元の人びとの苦勞がしのばれる。



学童疎開 昭和20年7月1日、備中高梁駅につき移動を待つ児童たち（精道国民学校）。



精道国民学校の児童 高梁川で、引率の先生たちとのひととき。

精道国民学校の校舎が焼けた8月6日の夜の様子は、当時2人の女の先生が宿直していましたが「雨のように焼夷弾が落ちて、校舎の中央から窓という窓から赤黒い炎が吹きはじめ…」と恐怖の体験を語っている。



精道国民学校 学童疎開先の頼久寺（現高梁市内）で記念撮影、当時3年生の児童と先生。



終戦 昭和20年8月、終戦の放送に聞き入る児童。頼久寺にて。



疎開先から帰校 昭和20年10月、疎開先から精道国民学校に帰ってきた児童たちは、焼け落ちた校舎を前に立ちすくんだ。